

学会企画シンポジウム 1

授業を通じた「学力」の変化はどのようにとらえられるか

——心理学的メカニズムに焦点をあてて——

企画・指定討論：藤村宣之（東京大学）

企画・司会：岡本真彦（大阪公立大学）

企画・指定討論：高橋雄介（京都大学）

企画：伊藤崇達（九州大学）

話題提供：工藤与志文（東北大学）

「知識構成水準モデル」から見た「学力」の変化
——「知識・技能」に関連して——

話題提供：橘 春菜（名古屋大学）

国語科授業における協同的探究学習を通じた
生徒の説明の変化

——「思考力・判断力・表現力」に関連して——

話題提供：中西良文（三重大学）

学びの過程を通して「学力」としての動機づけに
働きかける

——「主体的に学習に取り組む態度」に関連して——

企画趣旨：

教育心理学や発達心理学の領域では、知識、思考、問題解決、理解、動機づけ、社会性などの様態や変化、規定因や促進要因など、幅広い意味で「学力」に関連する理論的・実証的研究が重ねられてきている。一方、学校教育では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」といった「学力の三要素」が教育実践を通して育むべき目標と位置づけられているが、各要素の内実や相互の関連性、形成過程などが必ずしも明確にされているとはいえないと考えられる。日本教育心理学会第65回総会のシンポジウム「「学力」とは何か」では、教育心理学領域の実証的研究から、学力の「要素」やその形成過程が相互に密接に関連していることなどが明らかになった。第66回総会のシンポジウム「「学力」はどう高まるか」では、授業を直接対象としない実証的研究も含めて、「学力」に関連する内容についての遂行が高まるプロセスなどを検討した。それらの議論をベースとしなが

ら，本シンポジウムでは，授業を通じて一人ひとりの子どもの「学力」がどのように変化し，その変化はどのようにとらえられるかについて，教授・学習や発達に関する心理学的なプロセスやメカニズムとの関連で明らかにし，教育実践の課題について検討したい。